



何も無い工房

6年間、いつも自分がいた場所

ここには色々な思い出や記憶がある  
けれども、ここには何も無い事しか見えない

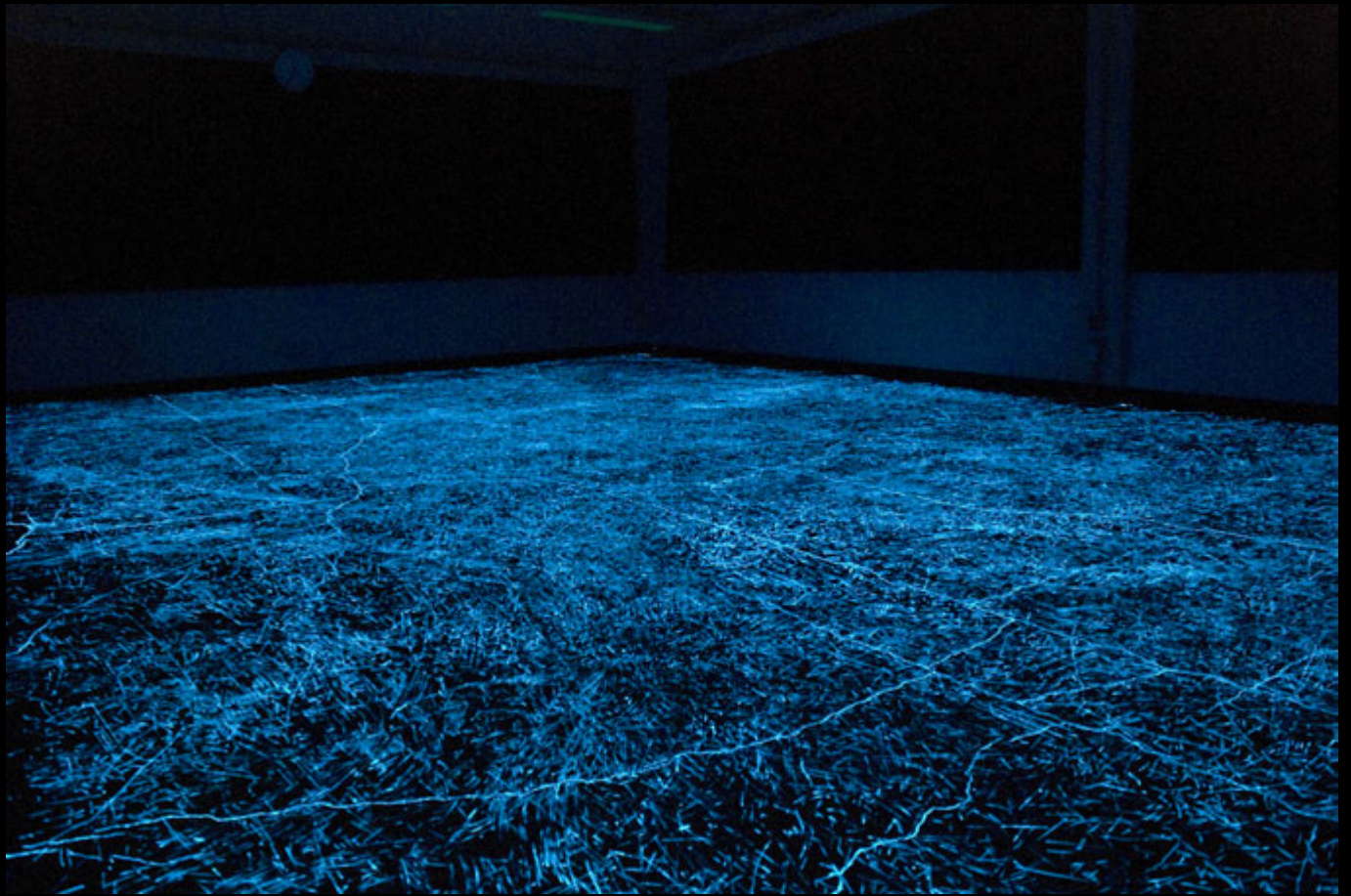
そして突然、電気が消える  
本当に何も見えなくなる



暗くなる  
何も見えなくなる

しかしその闇の中に光が浮かび始める  
目が闇に微弱な光の筋を捉え始める

それはしだいに床全面に広がって行く  
そして夜間飛行の様な光景が床全面に広がる

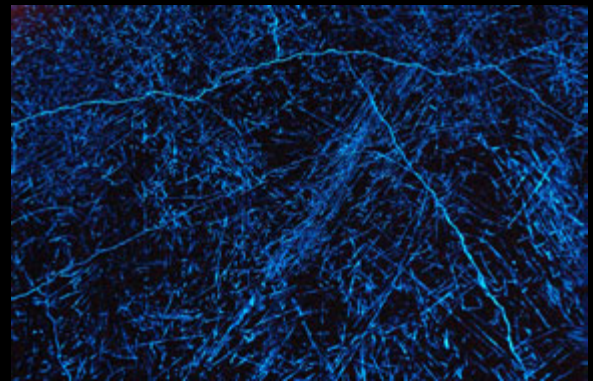
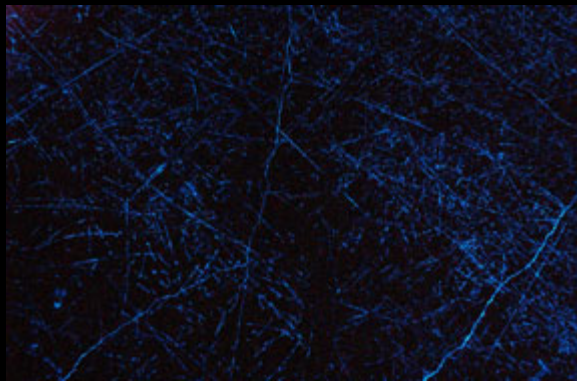
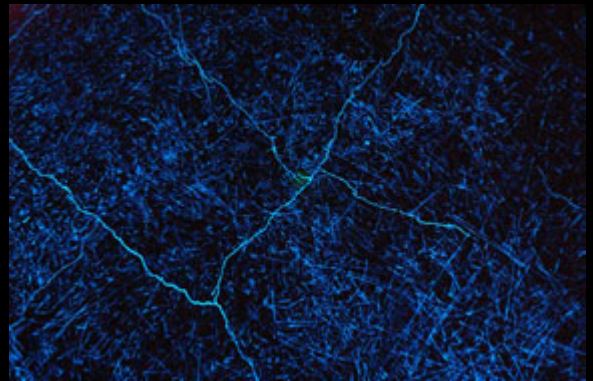
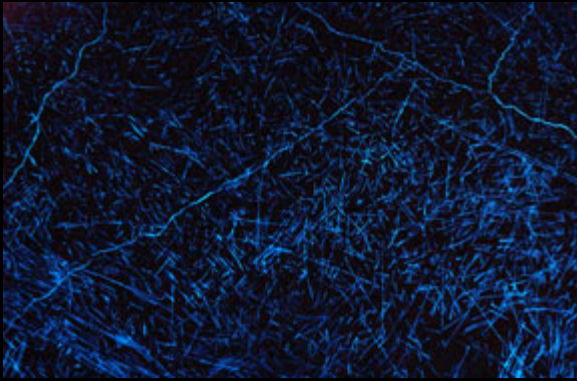


けれども、目はさらなる光を闇に求める  
筋は細かくなり、1本1本の光はさらに鮮明になる

そして、そのディテールまでが見えたある瞬間  
その光が、床の傷だと気付く

そこにずっとあった、傷である事に気が付く  
この工房に刻まれた、時間の痕跡である事に気が付く





見えていなかった傷と痕跡，時間と記憶

何も見えない空間から、傷の光が浮かび上がらせる

昔、ここで行われていた行動の痕を

ここにいた人達の記憶の痕跡が浮かび上がる

...

やがて電気が付けられる

何も無くなり、何も無い事が見える様になる

そして、全てが見えて、また何も見えなくなる